

臼杵図書館 開館 100周年記念
平成30年度 うすき市民
読書感想文・感想画・エッセイコンクール
入 選 作 品 集



臼杵市立臼杵図書館

はじめに

白杵図書館が開館して百年が経ちました。

「故郷白杵よ。文化の光に浴せよ。そしてより美しい白杵に成長せよ。」

大正七（一九一八）年、莊田平五郎氏は、白杵の文化向上を心から希望し、図書館と多くの書籍を寄贈しました。その図書館は、今、莊田平五郎記念こども図書館として、多くの子どもたちが利用しています。

今年度は白杵図書館開館百周年を記念して、『読書のまちづくり』を推進する行事を開催しました。十月には『三つのきょう育推進フォーラム』で開館百周年記念行事を開催し、図書館の歴史、読書活動の大切さをたくさんの方々を知っていただきました。

このコンクールは、毎年、読書週間にちなんで行われていますが、今年は、百周年記念莊田平五郎賞を設定しました。

読書感想文部門は四十三回、エッセイ部門は七回を迎えました。来年小学校一年生になる幼児を対象にした感想画部門は三回目の開催となりました。三部門に二、一四〇点の応募がありました。「読書活動を通じて、自分の気持ちや考えをしっかりと伝え、文字や言語による表現力が向上する」という『読書のまちづくり』の趣旨を達成している作品が寄せられました。

この作品集には、百周年を記念して募集した標語・川柳も掲載しています。読書の楽しみや図書館への愛着が表現されています。

「故郷白杵のぬくもりのある人間性」「先人の功績への感謝の心」「次の百年を担う子どもたちの生き生きとした表現」を味わってください。

ここからまた、『読書のまちうすき』の新しい百年がスタートします。

平成三十一年一月

目次

【読書感想文部門】

跳びはねる思考の中で	……	(白杵市長賞)	……	南中学校	三年	渡邊龍太郎	……	1
いのち	……	(白杵市議会議長賞)	……	白杵高等学校	二年	亀井愛里	……	3
自然の力と人の知恵を合わせたら	……	(白杵市教育長賞)	……	白杵小学校	四年	児玉要	……	5
あかるいはながさくといいな	……	(野上弥生子賞)	……	川登小学校	一年	藤田花優	……	6
「縁」を読んで	……	(野上弥生子賞)	……	白杵市	市	永富希望	……	7
ぼくとレイナ	……	(百周年記念荘田平五郎賞)	……	佐志生小学校	三年	眞田隆樹	……	9
がつこうのきもち	……	(優秀賞)	……	下北小学校	一年	芋岡佑碧	……	10
あきらめない気持ち	……	(優秀賞)	……	白杵小学校	四年	新名志朗	……	11
九太と僕	……	(優秀賞)	……	南中学校	一年	松井光	……	12
努力は才能を越える	……	(優秀賞)	……	南中学校	二年	小野海空	……	14
私とあなたをツナグもの	……	(優秀賞)	……	北中学校	三年	伊崎蒼	……	16
「考えよう世界のこと」を読んで	……	(佳作)	……	市浜小学校	三年	村井希都風	……	17
楽しさを見つけない	……	(佳作)	……	佐志生小学校	五年	戸上時翔	……	18
ありがとう	……	(佳作)	……	白杵南小学校	五年	高瀬恋太朗	……	19
奮闘するたすく	……	(佳作)	……	福良ヶ丘小学校	六年	遠藤香南海	……	21
がんばりを支えてくれる力	……	(佳作)	……	川登小学校	六年	江藤美来	……	22
「ゴミ」となる命	……	(佳作)	……	西中学校	一年	木村菜々美	……	23
笑顔で生きよう	……	(佳作)	……	東中学校	二年	児玉ひより	……	24
絆が人を変える	……	(佳作)	……	南中学校	二年	渡辺椿華	……	26

【エッセイ部門】

白杵つ子		(白杵市長賞)		白杵市	新上ゆみ		29
拝啓 首藤定様		(白杵市議会議長賞)		白杵市	吉田道代		30
白杵や野津の偉人の功績と感謝の心		(白杵市教育長賞)		白杵市	芋岡勝一		32
白杵の偉人ゝ祈りの里深田を偲ぶ		(特別賞)		白杵市野津町	村上丈士		33

【読書感想画部門】

うみキリンとあそぶわたし		(白杵市長賞)		市浜保育園	長澤昇子		35
ぞうきばやし		(白杵市議会議長賞)		野津北保育園	吉良咲耶		35
ふありー		(白杵市教育長賞)		すみれ保育園	玉田みちる		36
ともだちたくさんうれしいな		(百周年記念荘田平五郎賞)		アソカ幼稚園	竹田零弥		36
ピコリ!みずいろは「シャワー」くるまにつめたいみずがかかります		(優秀賞)		野津幼稚園	白杵萌南		37
はるひ弁当		(優秀賞)		すみれ保育園	釜崎晴陽		37
はりやまじごくへようこそ		(優秀賞)		中央保育所	亀井琉莉		37
水たまりににじがうつたよ		(優秀賞)		アソカ幼稚園	国崎巧		38
たこやきマントマン参上!		(優秀賞)		野津南保育園	首藤煌牙		38
おばけのみえないせかい		(優秀賞)		カトリック白杵幼稚園	中村杏里		38
海藻をたべるうみキリン		(優秀賞)		市浜保育園	廣瀬莉乃		39
ぴんくさんとかぼちゃ		(優秀賞)		白杵保育園	渡辺愛梨		39

読書感想文部門

臼杵市長賞

跳びはねる思考の中で

南中学校 三年 渡 邊 龍太郎

書名 跳びはねる思考

著者 東田 直樹

小さな頃、スーパーでこんな人を見かけたことがあります。周りに人がいないのに、急に大きな声を出したり、笑ったりしゃべったり。僕はちよつと怖いなと思いながら遠くで見っていました。しかし、僕の隣にいた母は、何事もないかのように、知らん顔をしていました。怖くないのかなと、そんな母の態度を不思議に思ったことを覚えています。

学校で、障がい者理解についての授業を受ける中で、スーパーで大きな声を出していた人も、障がいのある人だったのだと理解できるようになりました。しかし、その人がなぜそのような行動をとっていたかについては、分からないままでした。そんな僕の状態を知ってか知らずか、最近になって、母が、自閉症の人が自分について書いた本をすすめてくれました。

手に取ってみると、表紙には筆者の写真が載っています。「見た目は僕たちと変わらないな」そんな印象をうけました。この本

を読み進めるうちに、自閉症の人にしか分らない様々な感情があることが分かりました。その中でも、いくつか印象に残ったことがあります。自閉症者である筆者は、時に叫んだり暴れたりして、周りの人から注目されてしまうことがあります。しかし、その行動は、今までの怖い思い出や驚いた経験が「フラッシュバック」されることによって起こるのだそうです。それらの経験は、普段は記憶の中の引き出しにしまわれていますが、そこに鍵はなくふとしたはずみで中身が飛び出し、まるで今起こっているかのように、頭の中で再現されてしまうと書かれてありました。

もしかしたら、僕が見かけたスーパーで叫んでいた人も何かがフラッシュバックされていたのかもしれませんが。怖い思いをしていたのかもしれないと思うと、何も知らないで、その行動を、「怖い」と思ってしまったことが、申し訳ないような気持ちになってきました。

また、自閉症者は定型発達の人、いわゆる「普通」と言われる人より、周りの物によく視線を向けます。だから、落ち着きがなく、そわそわしていると思われがちです。しかしその時、身の回りの自然に様々な感情を抱いているのです。どのような環境にも美しく咲こうとしている植物に嫉妬したり、分からない何かを思い出させる空に感動したり。その表現を読んで、まるで詩人のようだと思いました。そんなふうに自然に思いをはせられる筆者は、素敵だと思います。

数えきれないほどの苦勞の中で生きているのは大変なことなの

ですが、僕は筆者のことをかわいそうだとは思いませんでした。そして筆者もまた、読者にかわいそうだと思つてほしかったわけではありません。彼は、当事者にしか分からない世界があるということを伝えたかったのです。「自閉症でなくてよかった」という話ではなく、「自閉症はこんなもの」という事実を分かつてほしい、そんな思いを感じられる本でした。

ものの見方や考え方、自分の気持ちとの付き合い方。僕たちはいろいろな部分で、少しずつ苦勞を持つて生きています。僕も、自分の考えを言葉にすることがとても苦手です。うまく当てはまる言葉を探そうとすると、どうしても時間がかかります。特に、大勢の人の前に立つと、緊張も加わつて、自分の言いたいことが何だったのかを忘れてしまいます。そして、黙りこんでしまうのです。決して、考えていないわけではないし、無視をしようと思つてゐるわけでもありません。しかし、どうしても言葉が出てこないのです。もし、僕のことを知らない人がその様子を見たら、僕を話しかけにくい人物だと思うでしょう。僕は自分から積極的に話しかけるといふことも苦手なので、その人とはコミュニケーションをはかることができないかもしれません。

しかし、幸せなことに、僕の周りには、そんな僕の困りを理解してくれる仲間がいます。僕が話し始めるまで、「急げよ」と言うわけでもなく、じつと待つてくれます。それはとても嬉しいことです。仲間の前でなら、相談事や趣味の話なども気を張らずにできます。自分の苦手なことや習性、性格を知つてゐる家族や友

人、先生方に囲まれ、穏やかに見守られて生きてゐるから、うまく自分として生きてゐられるのかもしれませんが。

自閉症者に関わらず、誰にでもその人だけが抱えている、苦手や困りがあるはずです。大きい小さいの差はあつても、全く苦手が無いという人はいないでしょう。みんながそれを分かり合うことができれば、お互いが優しく関わり合えると思います。これから、いろいろな人に出会う中で、自分には理解できない行動をとる人もゐるかもしれませんが。しかし、この本を読んで考えたことを思い出して、その人にどんな困りごとがあるのかを理解し、穏やかに見守ることのできる人でありたいです。

審査評

一冊の本は、これほどまでに、人を確かに学ばせ、伸びやかに成長させる力を持つてゐるのだと、改めて知らされました。自閉症への正しい理解と共感、まるで詩人のようと、エールにも似た温かさを寄せました。自分の今を、ありのままにみつめること、支えてくれる周りへの感謝が、気負いなくまとめられていました。最後の文は、これまでもこれからも、あなたの生き方そのものだと感動でいっぱいです。原稿用紙五枚目の最後のマスは、この感想文をしめくくる句点でした。これが推敲力です。

臼杵市議会議長賞

いのち

臼杵高等学校 二年 亀井 愛里

書名 いのちの授業

著者 日野原 重明

「ありがとう」私はこの本を読んで、一番に、この言葉が浮かんだ。両親に、妹に、祖父や祖母に、友達に。とにかく「ありがとう」を伝えたくなった。私が、今生きているのは、全て周りの人々のおかげだと思う。いつも当たり前に出てくることは、誰かのおかげで出てくることもかもしれない。生きていることもそうだと思う。今、生きていることが当たり前とは思わず、日々、周りの人に感謝を伝えていきたい。

しかし、自分から「ありがとう」を伝えるだけでなく、周りの人々から「ありがとう」を言われる人にもなりたいたい私は思う。この本の作者は、「いのちは時間。いのちは自分が使える時間。」だと言っている。私も、そのとおりだと思う。

今の私の時間の使い方はどうだろうかと考えてみた。ご飯を食べる、勉強をする、ゲームをする、寝るなど、考えてみれば自分のためにしていることばかりだ。人のためにしていることといえ、たまに家事を手伝ったり、委員会の仕事で全校の生徒へ向けて、ためになることをまとめた新聞を作ったりしているくらいだ。自分のためにしていることに比べたら、圧倒的に少ない。周りの

人々から感謝される人になるには、人のためにしていることを増やす必要がある。

そこで、今の私には何が出来るかを考えてみた。しかし、今の私に出来ることといえば、家事をもっと手伝うことくらいしか浮かんでこない。よく考えてみれば、父や母は、仕事をして、家族のために時間を使っている。ご飯を作ったり、洗濯をしたり、掃除をしたり、私たちのために多くの時間を使っている。だから、私も大人になった時に出来ること、誰かのために出来ることを考える。家事をすること、ボランティアに参加すること、仕事をすることなど、出来ることはたくさんある。これらのことを将来、大人になった時、実践したいと思う。

私は、小学校高学年の頃から看護師になりたいと思い始めた。それから、受験前に私たちを支えてくれた、中学校の先生にもあこがれを抱いた。そして、その二つの夢をかなえることができる職業が養護教諭である。今の私の夢は、養護教諭になることだ。もし、養護教諭になったら、たくさんの「ありがとう」を生徒や保護者からもらうことができるだろう。また、生徒や保護者に「ありがとう」を伝えることもできるだろう。

私はこの本を読んでもう一つ夢が出来た。それは、養護教諭になって、私が生徒に「いのちの授業」をすることだ。

私は、中学三年生の時に、「いのちの授業」を受けた。養護教諭の先生が、「いのち」についてたくさんのことを教えてくれた。先生が助産師さんだった頃の患者さんの話や、いのちの誕生のす

ばらしきについての話、病気で辛い思いをしている人の話など、とても心に残る話ばかりだった。最近では、自殺や事故などで亡くなってしまう人がいるが、そんなニュースを見て、「ふーん。」と流してしまうことが多い。ニュースを見た時、その場で流してしまうのではなく、そのニュースに耳を傾け、一人一つの小さな命をもっと大事にすることを、自分なりに考えるべきだと思う。

もし「いのちの授業」が出来るなら、私は、この本の作者のように、そして、中学三年生の時の先生のように、話を聞いた後にもっと命を大事にできるような授業がしたい。とても当たり前なことかもしれないが、「いのちの授業」で伝えたいことは、やはり、命の大切さである。それから、「いのちの時間」の使い方も教えたい。私は、人のためになることをしたいと言った。しかし、他の使い方もあるかもしれない。やりたい事をして悔いのない時間を過ごしたり、無駄のないようにいろいろなことにチャレンジして時間を過ごしたりすることだ。作者が言っているとおり、「いのちとは君たちが使える時間」だと生徒たちに教えてあげたい。

この本を読んだ中でとても心に響いた言葉がある。それは、「人をなぐつていいのは、心臓が止まってしまった時だけです」という言葉だ。それ以外は、どんな場合でも人をなぐつてはいけない。私は、よく妹とケンカをする。その時、なぐり合いのようになる。しかし、そんなことをしてはいけないんだと改めてこの本が教えてくれた。

私はこの本にたくさんの事を教えてもらった。これからは、「い

のちの時間」の使い方を考え、人のためになるように努力したり、周りの人にたくさん「ありがとう」を伝えたりしたい。そして新しくできた夢を達成できるように、毎日しっかり勉強し、ステキな養護教諭になれるように努力したい。いのちは心と一緒に、物ではない。目に見えないものだが、目に見えないものほど大切にすべきだと思う。そして、いつかこの本の作者のような心や考え方の持ち主になりたい。

審査評

全身で一冊の本を受け止め、中学時代の授業とも重ねて、将来の目標は憧れから、確たるものになりました。「いのちは心と一緒に、目に見えないものほど大切にすべき」を貫く、素敵な養護教諭になってください。

臼杵市教育長賞

自然の力と人の知恵を合わせたら…

臼杵小学校 四年 児玉 要

書名 干したから

著者 森枝 卓士

私はしいたけが大好きです。マヨネーズソテー、天ぶら、やきしいたけんカボスじょうゆかけ、どれも、とてもおいしいです。でも、このごろは、

「原木の生しいたけが、お店に出ないのよ。やっぱりこの暑さのせいかなあ。」

と、おばあちゃんが言っていました。それで、生しいたけの代わりに、干しいたけでおいしい料理を作ってくれます。

夏休みに『干したから…』と言う本を読みました。ページいっぱい「干した物」の写真がのっていました。ふだん「干した物」と気が付かずに食べている物がたくさんありました。そこで、私の家にある物を探してみました。お米、小麦こ、にぼし、のり、パスタなど三十以上もありびつくりしました。

どれもお母さんやおばあちゃんが、ご飯作りで材料がたりなくて困った時、「あつたあ、助かったわ。」と言っている物ばかりです。

こんな便利な物を最初に考えた人は、誰だろうと思いました。作者は、世界中の市場でいろいろな干した物を見たと書いていました。カエル、イモリ、コウモリ、ネズミの干した物もあつた

そうです。その国その国で電気や冷ぞう庫がない時代に、人々が食べ物にくさせないように長く食べられるように工夫した方法だと言う事が分かりました。

干した物の中に、日本のかつおぶしとそっくりな物がスリランカにありました。作り方もほとんど同じで、ちがうところは「菌をつける所がないだけでした。

「干したらくさらない」「干したら保ぞんがきき、長く食べられる」「干したらおいしくなる」と、人の知恵がだんだんと重なって、今のようになり、おいしく食べられるようになってきたのだと分かりました。

私はお正月に干し柿をよく食べます。甘くてとてもおいしいです。今まではふつうの柿を干して出来た物だと思っていました。でも、しぶ柿を干して出来た物だと知って、おどろきました。しぶ柿が、干したら甘くなるなんてどうして分かったのだろう。やっぱり人間ってすごいなあと思いました。

野菜や果物、魚や肉などの自然のめぐみと太陽や風などの自然の力と人間のねがいや知恵が結び合わさって出来た物が「干した物」だと思いました。

今はソーラーパネルの太陽光発電や風車の風力発電があつたこつちにあり、自然の力が利用されています。暑い夏でも冷ぼうのきいた部屋で、すずしくすごすことができます。

でも、今年の夏はとても暑くて、熱中症で病院に運ばれる人がたくさんいました。学校のプールも暑くておよげませんでした。

こんどは人の知恵で、この暑さを利用して、役に立つ物に変化できたらいいなあと、思いました。

審査評

説明の部分を確かに読み取り、写真で一つひとつ楽しく確認して、昔の人の知恵や、世界中にある工夫・共通点を学びました。干し柿の秘密もわかり、自然の力と人間の知恵をもつと結びつけようと、未来への思いが、広がり始めました。食物への感謝の気持ちが表現できています。

野上弥生子賞

あかるいはながさくといいな

川登小学校 一年 藤田花優

書名 野上弥生子からの5つのお話

心のやすらぎから「あさがお」

著者 野上 弥生子

わたしが、このおはなしで一ばんすきなばめんは、おひさまがふたりのあさがおにどつちかがかつのではなく、ふたりともかたせようと、チャンスをおあげたところです。

はじめのうちは、あさがおがきょうそうをして、こどもたちもみずやりをがんばっていたり、あついなかでも、おおきくならうとがんばっていたりするようにすをおひさまは、ちゃんとみていたんだとおもいます。

おひさまは、ほんとうは、きょうそうさせたくなかったとおもいました。わけは、はやくのびようとがんばっているふたりをまけさせたり、かたせたりしたくなかったとおもったからです。だから、おひさまはおなじかずだけさかせたんだらうな。

ふたりがきょうそうするのは、わるいとおもいました。うんどうかいのぜんりよくそうをしたときに、みんな一いになるためにがんばっていました。どのともだちもがんばってれんしゅうしていたのに、じゅんいがついたとき、わたしはおもいつきりよるこべませんでした。うしろのひとも、いっしょうけんめいがんばっ

ているのをみていたから、二いになったともだちのくやしそうな
かおをみると、かわいそうでした。

ふたりのあさがおはどんなはなをさかせたのか、かんがえてみ
ました。きつと、きれいなはなを、たくさんさかせたのじゃない
かな。わけは、ふたりがいっしょうけんめいがんばっているところ
を、おひさまはみていたから、わたしだったら、きれいなはな
をさかせたいとおもいました。

わたしのところにも、いろんなあかるいいろのあさがおが、た
くさんさいています。いちりんしゃでは、さいしょはすぐにこけ
ていたけど、まいにちれんしゅうしたら、いまでは五十メートル
いけるようになりました。

あさがおは、かれてもまためをだすとおもいます。わたしも、
つぎつぎとはなをさかせたいです。

審査評

「お陽さまはちゃんと見ている。同じようにチャンスをあげ
るんだ。」お陽さまの心に気づきました。「ときよう走はがん
ばることがすばらしいよ。」と伝えることができる、みゆさ
んの心の朝顔は、これから一輪車の取り組みやいろいろなる
活動で明るい花を咲かせ続けることでしょう。

野上弥生子賞

「縁」を読んで

白杵市 永 富 希 望

書名 野上弥生子全集第一巻「縁」
著者 野上 弥生子

再びこの物語に触れようと思ったのは、私がやっと母になれた
からだ。主人公の寿美子は母が嫁入りした時の話をばば様から聞
き、男女の縁の不思議を考える。私は二十年前に出会った寿美子
と共に、弥生子が縁を「赤縄」と表現した物語に入り込んでいった。
そこには日本の美しい習慣や風習を淡々と描いていく弥生子の
世界が広がり、ばば様の前で恥ずかしそうに笑う十八歳の寿美子
がいた。時代は明治。寿美子の母は二十五里も離れた熊本県の男
性と結ばれる。「一大奇跡をとんと当たり前の事」として。そし
て眉を剃り落とし、女の覚悟を見せた。平成を生きる私には不合
理に思えるが、だからこそ当時の女性達は運命の中で輝こうとし
たのだろう。

二十年振りに読んでみると、弥生子の高い写生力にも魅了され
た。「白百合花の五弁を並べた様な美しい指先」「本堂の棟瓦がそ
の日影を反して水銀色に光る」とうっとりする穏やかな描写が続
く。知的に整理されている一方で、ばば様が小鳥の頭を小僧に例
えたり、夫の白髪抜きを「極楽詣りぢや」と称したりするなど、
笑いを誘う緩急ある表現に更に引き込まれる。縁の糸があるので

はと袖や胸元を探し、理想の男性像を列挙していく寿美子の乙女心も愛らしい。弥生子の若さ溢れるユーモアが好きだ。

「縁」との出会いには高校三年生の夏。受験への焦りで人生の目標や喜びを見失い、自分の原点に戻るものにすがるうと弥生子の処女作を手にした。十八歳の私は、明るい寿美子に会ってみたと思った。そうすれば自分のふがいなさを払拭できる気がしたのだ。物語の舞台とされる三重町の寺へ足を運び、面影を探した。寿美子は素敵な縁に恵まれただろうか、二十年前も今も祈らずにはられない。

中学、高校時代は、弥生子の作品の中でも「ベトナムの戦火に想う」「海神丸」といった戦争の愚かさや命の重みを問うものを選んでいた。弥生子の死生観や倫理観を通し、自分の命や存在を肯定したかったのかもしれない。

読後の感想文の中で命について幼いなりに語り、「やがて子も産まれるだろう」と書いたことがある。しかし、私にとって母になることは容易ではなかった。仕事では人脈に恵まれたが、子どもがいないことで常にどこかで空虚を感じていた。

それが結婚十一年目に待望の第一子を授かったのだ。一大奇跡。夫との出会いに寿美子の言う赤縄の存在を実感していたが、夫や両親と血のつながった子を抱くことができて自分を中心とした縁が確かなもの、より深いものとなった気がした。

わが子を抱いて自宅の近くを散歩すると、さまざまな人から声を掛けられる。月齢を尋ねられ、子育ての話に花が咲く。「女の

子はいずれお母さんを助けてくれるよ」「母乳が出らんで苦労したわあ」と人それぞれの昔話を聞いているうち、心の疲れが和らいでいく。自転車を通り過ぎる学生から挨拶されると、心に爽やかな風が吹き抜ける。人と人はこのようにしてつながるのか。出産後は家族としか顔を合わせない日が続いたが、一歩外に出ると多くの温もりがあった。

市内各地にある子育て支援拠点に行くと、離乳食や発達について専門家や他のママ達からアドバイスを受けることができる。どこに出掛けても初めて会う人ばかりなのに、わが子を介してこんなにも数々の縁に恵まれるとは考えもしなかった。子連れの外出は手間が掛かると自宅に引きこもっていても、子育てが「孤育て」になってしまう。たとえ演奏会に行けなくても、習い事に通わせられなくても、さまざまな人と出会うだけでいい。その人の人生の一端に触れるだけで、貴重な「文化」をわが子へ贈ることになる。「縁」の頁を往復するうちに気付いた。子どものいない私も決して孤独ではなかった。掛け替えのない多くの縁に気付いていなかっただけ。そして幸せというものは、誰かが与えてくれるものではなく、自分の中にあるのだ。奇跡を当たり前と受け入れるのも、出産というありふれた営みを奇跡として感謝するのも、自分次第なのだ。

初めて「縁」を開いてから二十年。親になれた一年目に再び弥生子の処女作を開き、今、人生の新たな出発点にいるのだと胸が高まる。弥生子はこの作品で日本文壇に現れ、妻や母の顔を持ち

ながら作家としての地位を高めていった。私は何を築いていけるだろう―。

子育てに余裕が生まれたら、今度は孤独を感じているママに縁の糸を紡いであげられる存在になろう。わが子の寝顔を眺め、そう誓った。

審査評

原稿用紙五枚の全てに溢れるあなたの感性こそ、野上作品の女性として、妻・母として、凛と輝く魂そのものだと感じました。構成力・語彙力・主題への迫り方ともにあなたしか書けない感銘深い作品となりました。――豊かな読み手が、豊かな書き手に成る――姿でした。

百周年記念荘田平五郎賞

ぼくとレイナ

佐志生小学校 三年 眞田 隆樹

書名 レイナが島にやってきた！

著者 長崎 夏海

南の島の、ガジュマルの木がある小学校に一人の女の子が転入してきた。その子の名前はレイナ。

この小学校は、四年生と三年生がふく式学級になっている。たぶん、小さな小学校なのだろうな。

そこに転校生がやってきたのだ。四年生が三人しかいなかったから、みんなとてもよろこんでいた。だって、友だちは一人でも多いほうがいいから。

ぼくも今年、大分市の人数の多い、大きな小学校から、佐志生小学校へ転校してきた。佐志生小の二年と三年は、ふく式学級になっている。まるでこの本の主人公のレイナと同じようだ。

転校してきた時、一番おどろいたのは、大分の小学校は一クラスが二十人以上いたけれど佐志生小は、全校で二十六人しかいなかったことだ。

ぼくもこの本のレイナと同じように、転校してきた時はみんなからやさしくしてもらえた。そのおかげで、すぐ学校にもなじめたし、みんなともなかよくなれた。

ぼくとレイナのちがいは、レイナはおしゃべりがすきで、木のぼりするほど元気がいい。ぼくは、本を読む方がすきだ。それと、佐志生小に来てはじめて一りん車のれん習もすきだ。大分ではなかったけれど、佐志生小に来てからいつしうけんめいれん習して、体育かんの半分くらいいいけるようになった。

レイナは、おしゃべりずきで元気がよくて、思ったことを何でも言ってしまう。だから、島の子どもたちと、けんかもしてしまう。ぼくは、佐志生小に来て、一回もけんかなんかしたことがない。それはみんなといて、とても楽しいからだ。家に帰ると、おとう

ととけんかするけど、学校ではまるでちがう。

レイナは、家ではおとなしいけど、学校では友だちとけんかしてしまふ。まるで、ぼくと逆だなと思った。

そんなレイナも、四年生の友だちが家に来て、じじょうを話すうちになかよくなり、また元気に学校に行けるようになった。レイナのいろいろな話を聞くうちに、だれとでもなかよくなった。読んでいて「よかった。」とぼくは思った。だって、ずーつとけんかしていたら、だれともなかよくなれないし、友だちがいなくなつて、つらいだろうなと思うから。

同じ転校生のぼくにとつて、すぐ自分とかさねてよむことができたお話だった。

審査評

レイナを応援しながら、同じ転校生である自分の新しい環境に感謝して過ごしている様子がよく伝わってきます。「だって」「まるで」の使い方、大切なところで使う「くだから」も、ことばが生きています。百歳になった図書館もきくと喜んでいきます。

優秀賞

がつこうのきもち

下北小学校 一年 芋 岡 佑 碧

書名 がつこうだってどきどきしてる
著者 アダム・レックス

「がつこうとおはなしできたら、たのしいだろうな。」

四がつに、にゅうがくしたときは、あたらしいともだちができるかしんぱいでした。

はじめてのことがいっぱい、しんぞうがどきどきしました。さいしよは、すこしなみだもできました。だから、このほんにでてくるがつこうのきもちが、わかりました。

このほんのなかで、一ばんおもしろかったところは、きゅうしよくのとくに、わらいすぎてはなからぎゅうにゅうがでてしまったところ。ぼくたちのクラスも、きゅうしよくのじかんはにぎやかです。

ぼくががつこうですきなじかんは、みんなでいっしょにおべんきようするじかんです。みんなといっしょだとたのしいからです。にがてなことは、しずかにおはなしをきくことです。ついおしゃべりをしたくなります。

にがてなことや、しんぱいなこともあるけど、ゆうきをだしてがんばろうとおもいます。

がつこうが、「きらい。」っていわれたり、ないてばかりいることをみて、きもちがとげとげしてみずをかけてしまったり、ベルを

ならしてしまったりしたけど、ちゃんとあやまることができてよかったとおもいます。

ぼくたちのしもきたしようがっこうは、一〇七さいです。このほんにでてくるがっこうよりおとしよりはです。

しもきたしようがっこうのいいところは、じょうきゅうせいがやさしいところです。いろんなことをたすけてくれるので、あんしんします。

ぼくは、がっこうのことがもつとすきになるように、にがてなことができるようにがんばります。

がっこうとおはなしができれば、

「ぼく、がんばるよ。」

っていいたいです。

優秀賞

あきらめない気持ち

白杵小学校 四年 新名 志朗

書名 メン！試練の剣

著者 開 隆人

「ぼく、体格いいなあ。剣道せんかえ。」

学校の帰り道、と中までむかえにきてくれていたおばあちゃんと歩いていました。その時、声をかけられました。見ると、信号

てい止していた車を運転している男の人でした。

その人は、おばあちゃんの友だちで、ぼくの剣道の先生になる人でした。

もし、この出会いがなければ、ぼくは剣道をしていなかったでしょう。

初めて見学に行った日に、先生が竹刀をくれました。竹刀は、重かったです。ぼくも、「みんなと練習したいな、大きな声を出せるようになりたいな」と思いました。それがきっかけで剣道を始めました。ぼくが小学一年生の時です。

『メン！ 試練の剣』は、ぼくに「どんなことがあってもあきらめない気持ち」を教えてくださいました。

それは、第一小学校の剣道部の存続がかかったスポーツ少年団剣道大会にのぞむ時の、主人公たちの気持ちです。この試合は、団体戦でした。剣道の団体戦は五人です。一回戦で勝たなければ、剣道部はなくなってしまうのに、剣道をしているのは、主人公のミクだけでした。他の四人は、元サッカー部で剣道を始めてまだ二週間しかたっていないでした。

ぼくは、ミクたちが試合に勝てるかどうか不安になりました。試合までに練習できる時間が少なかったからです。

そして、ぼくが、初めて剣道の団体戦に出た日のことを思い出しました。ぼくは、あまり剣道が強くありません。ほ欠で、代わりの参加でした。その上、副将でした。「いやだな出たくないな」という気持ちでいっぱいでした。心のじゅんぴができていなかった

たからです。けれど、出る以上はがんばっていい試合をしようと思いました。

相手は六年生でした。「こわい」と思いました。大きくて、強そうでした。ぼくは、勝てる自信がありませんでした。「できれば、引きわけまで持ちこたえたいな」と思いました。打たれてもよいからまっすぐ行く。大きな声を出す。ぼくは、相手に「メン」とおされて、何回も転びました。面を二回打たれてしまい、すぐに負けました。

でも、ミクたち第一小学校剣道部はちがいました。相手は昨年ゆう勝したチームでした。元サッカー部の四人は、試合に出るのがうれしくてワクワクしていました。この仲間たちと剣道をつづけたいというミクの思いが、副将戦の勝利につながりました。

ぼくは、ミクたちからどんな困なんがあっても練習して立ち向かうことを学びました。自分を見直すことができました。ぼくは、これから剣道が続いていきます。どんな時でも最後まであきらめずにがんばりたいです。

優秀賞

九太と僕

南中学校 一年 松井 光

書名 バケモノの子

著者 細田 守

「こいつは今からオレの弟子だ！」

九歳でたった一人の家族だった母親を亡くした蓮。親戚の叔父さんが引き取りにやって来るが、蓮は叔父さんの何もかもを勝手に決めてしまう高圧的な発言が気に入らず、「一人で生きていく」と、その場を飛び出した。しかし、街をさまよっているうちに、「バケモノの世界」へと迷い込んでしまう。その世界で初めて出会ったのが、熊徹だった。熊徹は蓮の顔をまじまじと眺め、「おまえ――オレと一緒に来るか？」と声をかけた。

親を亡くし、孤独だった蓮にとって、それはどんなに温かい言葉だっただろう。さらに熊徹は「こいつは今からオレの弟子だ！」と言う。反対するバケモノの仲間たちに、「見所のある奴に目を掛けちゃいけないのか？」と言い返すのだ。

僕はこの時、担任の先生に言われた言葉を思い出していた。「応援団か運動会実行委員やってみない？」僕は困ってしまった。小学校の時まで、人前に立つような役を経験したことがなかったからだ。しかし、内心嬉しさもあった。誰かに期待されていると思うと、今の自分を認められたような気がしたのだ。

だからきつと、蓮も嬉しかったに違いない。親戚からは、本家の血を引いているからという理由で引き取られそうになっていたが、熊徹は違う。蓮を一人の人間として認めてくれていた。バケモノの世界という信じられない世界に入ってしまったのにも関わらず、熊徹の弟子になろうと思ったのは、そういう部分も大きかったのかもしれない。

僕は、応援団員をやってみることにした。先生の期待にこたえたいという気持ちもあったが、友達の存在も大きかった。その友達も、決して人前に出るのが得意なタイプではなかった。「あいつがやるなら」、そう思っただけで挑戦してみた。いざ応援団の練習が始まると、大きな声を出すのに苦労した。それまであんなに大きな声を出したことなどなかったと思う。

僕が苦労したように、蓮もまた、大変な思いをしていた。「九太」と名付けられ、弟子として熊徹の身の回りのことをするようになる。料理や掃除を覚えることも、まだ九歳の九太にとっては大変だったに違いない。師匠の熊徹は、ていねいに指導してくれるわけでもない。だから九太は、熊徹をよく観察することで、その技を見よう見まねで習得していく。九太は決して弱音を吐かなかった。負けず嫌いで、一生懸命だった。僕も、負けず嫌いだ。大きな声を出すのは苦手だったけれど、「できない」とは言いたくなかった。演舞の動きも複雑で覚えるのが大変だったが、九太のよう先輩の動きをしつかり目に焼き付けることで、少しずつ動けるようになっていった。

しかし、九太が頑張ったのは、負けず嫌いな性格だったからというだけではないと思う。師匠の熊徹や、成長をそばで見守ってくれる多々良や百秋坊たちとの、信頼関係があったからだ。僕も、応援団の練習が体力的にきつかったり、先輩から「もつと声を出して」と言われ、落ち込んだりした時、仲間のことを思い出した。いつもお調子者な発言でクラスを盛り上げてくれる友達が、隣の応援団で真剣な顔で大きな声を出している。人前に立つのが苦手だった友達が、実行委員として全校生徒の前に立って、練習の説明をしている。そんな姿を思い出すと、「自分も頑張らなければ」という気持ちになれた。一人ではできないことも、信頼できる仲間がいたらできるということを、この本から改めて教えられた気がする。僕が、仲間がいてくれてよかったと思ったように、九太も熊徹も、お互いがいてよかったと思っただろう。

ある時、幼いころは優等生だった一郎彦がひょう変して暴れ出す。それは、一郎彦もまた、九太と同じように人間界からやって来ていたからだ。バケモノの世界では、人間は心の奥に闇を宿して手に負えなくなると言われていた。僕は、人間にしかない心の闇は何だろうと考えた。それは、誰からも認められない孤独や、自分にはないものを持っている人に対する嫉妬なのではないか。これらの闇を大きくしないためには、やはり信頼できる仲間が大切だ。仲間と一緒に頑張っている僕は、幸せだと思った。

修行のかけがえがあつて、九太はどんどん強くなっていく。しかし、九太は人間の世界に戻ることを選択する。九歳から十七歳までの

八年間をバケモノの世界で過ごした九太にとって、それはとても勇気のいる決断だったと思う。きつと熊徹達との強い絆があったから、新しいことにも挑戦できたのだろう。僕も、運動会の後、クラス委員に立候補した。九太に負けないように、今までとは違う新しい自分を探していきたい。

優秀賞

努力は才能を越える

南中学校 二年 小野 海 空

書名 羊と鋼の森

著者 宮下 奈都

いったい何のためにこの練習をしているのだろう。私には、もともと才能なんてないのに。夏休みから、秋の駅伝大会に向けての練習が本格的に始まった。私は、長距離走が苦手だ。今年の夏は、例年以上の暑さで、ただでさえやる気が出なかった。毎日毎日繰り返される練習が、嫌でたまらなかった。

「羊と鋼の森」を手にとったのは、そんな時だ。映画化されていたことは知っていたし、そのコマースシャルで、ピアノに関連した話であることは想像できた。ピアノを習っている私は、「ピアノニストの話のかな」と思い、読んでみることにした。

これといった夢を持っていなかった高校二年生の外村は、ある

日学校で、調律師の板鳥に出会う。板鳥の調律の様子を見ているうちに、森の匂いを感じる。ただ調整されていく音を聞いていただけなのに。その経験がきっかけとなり、高校卒業後、調律師養成のための専門学校へと進学し、板鳥と同じ楽器店へ就職する。その行動力に、私は驚いた。たった一度の出会いで、将来を決めてしまえるものなのか。私には、全く理解できなかった。一方で、うらやましいという気持ちもあった。私には、そんなにも夢中になれることがないからだ。ちょうど部活への気持ちが終わる向きだったこともあり、主人公の外村に感情移入できないまま、読み進めていった。

就職してからの外村は、早く一人前の調律師になろうと、必死に柳や秋野といった先輩調律師の調律の仕方を真似ていた。その様子は、あまりに必死だった。そんな外村に、板鳥が声をかける。「焦ってはいけません、こつこつ、こつこつです。」その言葉に、私は、はつとさせられた。駅伝の練習もそうかもしれないと思ったのだ。

自分では真面目に練習に励んでいるつもりだが、なかなか記録は伸びない。苦しんでいる私の前を、涼しい顔で駆け抜けていく仲間の後ろ姿に、自分自身が情けなくなる。そしていつの間にか、「もともと、自分には長距離走の才能がないんだ」と思い込むことによって、楽になろうとしていた。顧問の先生が考えてくれる練習メニューにも、ただのアップなのに、どうしてこんなにも長い距離を走らされるのか、最初に言っていたメニューに追加なん

てしないでほしいと、不満がたまっていた。「どうせ、足が速い人は、才能があるからなんだ。自分には才能がないのだから、思うように走れなくても仕方がない」、そう思っていた。しかし、板島の言葉に、「私は、こつこつと取り組んできただろうか。焦ってばかりで、結果が出ないことを才能のせいにはいなかっただろうか」、そう気付かされた。

外村は、決して才能の有無のせいにはなかった。才能が欲しいと思っても、先輩の調律について行き、いろいろなことをメモにとっていた。家に帰ったら、それまで聞いたこともなかったクラシックを聴いて過ごした。できることを、本当にこつこつ、こつこつとやっていた。最初は感情移入できなかった外村を、私はいつの間にか応援するようになっていた。

そんな外村が、調律師として、いろいろな顧客を訪れたエピソードの一つに、私がとても嬉しくなったものがある。それは引きこもりの青年の家に調律に訪れた話だ。ピアノのふたを開けてみると、前回の調律から十五年も経っていることが分かった。それはきつと、青年が引きこもり始めた時だったに違いない。自分の調律に、まだ自信の持てなかった外村だが、青年の時間を取り戻すように、一つ一つ丁寧に調律していく。そのピアノを弾いた青年が、それまでの無表情を崩し、笑顔になる。そして、一心に音楽を奏で始めた。私は、外村の音が認められたことが、嬉しかった。それは、彼のこつこつと積み重ねてきた努力が認められたからだと思う。

外村の頑張りとは、私に「才能がないことに甘えない」勇気を与えてくれた。あんなに嫌で受け身だった駅伝の練習にも、前向きに臨めるようになった。才能がある人と決めつけていた仲間も、よく見れば、人知れず努力をしていた。両手にダンベルを持って走ったり、みんなが帰った後に、自主練習をしたり。そういった努力があつてこそその走りだったのだと気づくことができた。そんな仲間の姿に励まされて、苦しくても弱音を吐かずに練習に取り組むことができた。駅伝大会当日、三キロメートルを走り、仲間タスキをつないだとき、何とも言えない達成感を味わうことができたのは、それまでの「こつこつ」があつたからだと思う。

私はこれからも、才能のせいにはしないで、いろいろなことに挑戦していきたい。外村のように、こつこつ、こつこつと。

優秀賞

私とあなたをツナグもの

北中学校 三年 伊崎 蒼

書名 ツナグ

著者 辻村 深月

一昨年の夏、私の祖父が亡くなった。じゃあ「使者」を使って死んだ祖父に会いたいか？と尋ねられても、私はきつとNOだ。もちろん、祖父のことが嫌いなわけではない。これは、そんな「生者」と「死者」の再会について深く考えさせられる物語である。もし、死んだ人にもう一度だけ会えるとしたら、あなたは誰に会いたいですか？

条件一、生きている間に一度だけ、死んだ後に一度だけ、「反対側」にいる人に会うことができる。条件二、死んだ人から生きている人に指名して会うことはできない。死者は常に待つ側である。条件三、生者と死者が会えるのは一晩だけ。条件四、無料である。この四つが、使者のルールである。使者と書いて「ツナグ」と読み、本のタイトルは、生者と死者を再会させることが出来るツナグという人のことだ。そんなことがあるわけがないと思う人もいるだろうが、そう、そんなことはありえない。生者と死者は常に反対で、一度死ぬと二度と会うことは許されないのだ。だからこそみんな、ツナグを使って死者に会いたいと思うのであろう。

私はこれを読んだとき、一番に母の顔が浮かんだ。普通はみんな、誰に会いたいか会ってもらいたいと思うのだろうが、私

がツナグになれば、母と、曾祖母であるひいおばちゃんに会ってほしいと思った。小さい頃、貧しい暮らしをしていた母は、誕生日にケーキを買ってと曾祖母に頼むと、曾祖母はどこでも売っている生クリームが入ったパンにろうそくをさして、「誕生日ケーキだよ」と言ったそうだ。でも母は、「こんなのケーキじゃない」と怒って食べなかった。母は今でも、その話を私にしてくれる。ひどいことを言ってしまったから謝りたいと後悔しているそう。だから私はツナグになつて、母と曾祖母を会わせてあげたいと思った。そして仲直りをしてほしい。母が私に「おばちゃんを大事にしなさい」とよく言うのは、母がこんな体験をしたからだと思った。

「ツナグ」というこの物語は、私たち生者に対してさまざまな問いを投げかけていると思う。「自分は誰に会いたいか」「自分が死んだとき、会ってくれる人はいるか」「自分は誰かに会いたいと思うことはあるだろうか」「自分がツナグなら、誰と誰に会ってもらいたいのか」解説の本多孝好が言うとおり、そんな思いをはせた時点で作者の辻村深月は読者にとつてのツナグになっているのであろう。私は考えてみたが、今、死んだ人に会いたいとは思わないし、会う人がいない。それはきつと、私の今までの人生の十五年間の中で身内やとても大切な人を失った経験が少ないからだと思う。でもきつと、誰に会いたいかというその答えはいつでも変えることができるから、十年後は明確に会いたい人が決まっ

ているかもしれないし、もしかしたら明日、決まるかもしれない。だから人と人とのつながりを大切にしたいと、この本は教えているのだ。

作者の辻村深月はどのようにしてこの本を書いたのか。それは解説のページに大きなヒントがあった。「自分のために書いてもらったと幸福に勘違いしながら続けてきた読者体験が、自分の血肉になっている」と。私は作者のように、「この物語は自分だけのためにあるんだ。自分のために書いてもらったんだ」と思いながら読者をしたことはない。もちろん私たち一般庶民には自分だけのためにある物語なんてないわけで、作者のつくった世界についていきながら読者をする。辻村深月もきつと私たちと同じで自分だけの本などないはずだ。だが解説にあったように、自分だけのためにある物語だと「勘違い」して読むのは各々の自由である。作者はそんなふうに読者をする事で、本の中に入りこむようにして読んでいたのだと思う。そしてこの「ツナグ」という物語は、多くの人が「幸福に勘違いする」作品になったと思う。現に私も、本を読んだあとにこんなにも誰かに伝えたいと思ったのは久しぶりであった。作者が幼い頃から続けてきた読書が、今これを読む私たちの読書へとつながっているのである。

私はこの物語を読んで、人と人とのつながりをもっと大事にしようと思った。そして私の周りにいる人たちに感謝して生きていこうと思う。私が死んだとき、一生に一回のチケットを使ってでも「あいつに会いたい」と願ってもらえるような素晴らしい人間

になりたい。そして、常に幸せや笑顔を届ける、誰かにとってのツナグでありたいと思う。

佳作

「考えよう世界のこと」を読んで

市浜小学校 三年 村 井 希都風

書名 考えよう世界のこと

著者 真珠 まりこ

ぼくはこの本を読んで、世界のことにいろいろと考えてみようと思いました。

この本の中で、十人の子どもたちがようかいされています。みんなぼくと同じ九才です。どんな子どもたちがようかいされているのだろうと、ワクワクしました。

読んでいくと、ぼくは、かわいそうだなあと思う気持ちになってきました。十人の子どもたちの中で、とくにぼくが心にのこった二人をしようかいます。

一人目は、ネパールにすんでいるサビトリちゃんです。サビトリちゃんは水くみの仕事をしています。毎日、四時間かけて水をはこんでいます。水くみで学校に行けないことにびっくりしました。

二人目は、インドネシアにすんでいるカリム君です。カリム君

は、ゴミの山で、あきかんやガラスをひろってお金にかえています。ゴミひろいをしないと、その日に食べるものを買うお金がないそうです。やっぱり、カリム君も学校には行っていないのです。

ぼくと同じ九才の子どもが学校には行かず、はたらいで仕事をするってどういうことなのか、はじめはよく分かりませんでした。子どもが学校に行くのは当たり前だと思っていたからです。ぼくたちは学校に行つて、勉強したり、友だちと遊んだりすることが仕事です。じゅぎょう中、一しょうけん命に考えたり、休み時間に、友だちとおにごっこをして思いきり体を動かしたりすることが、ぼくは一番すきで楽しいです。だけど、この本の中の十人の子どもたちは、勉強することも、友だちと遊ぶことも知らないのかなあと思うと、とてもかわいそうです。

ぼくと同じ九才の子どもたちが、少しでも学校に行けたり、友だちと遊べるようになるために、ぼくができることって何だろう、と考えてみました。

ぼくの通う小学校では、毎年、ぼ金を集めたり、書きそんじハガキを集めたりします。これは、まずしい国の子どもたちのワクチンや勉強道具のえん筆となるそうです。何回かだけど、ぼ金をしたたりハガキを持つてきたりしました。

今、社会の学習で、みそづくりやみそ工場について勉強しています。その中で、材料の大豆を外国から運んでいることを知りました。もしかしたら、その大豆を、学校に行かずにいたらいる子どもたちが作っているのかもしれない。大豆がいの他の

食べ物もそうかもしれません。そう考えると、毎日の食べ物をのこさず食べることも、ぼくができることではないだろうかと思ひつきました。

ぼくができることから少しずつしていき、世界の子どもたちのためにがんばっていきたいです。

佳作

楽しさを見つけたい

佐志生小学校 五年 戸上 時翔

書名 命の響

著者 館野 泉

ぼくは、四年生の時に道德で、館野泉さんのことを勉強しました。それで、この「命の響」を読んでみたいと思いました。

世界的なピアニストの館野泉さんは、コンサートでピアノをひいていたら、急に倒れてしまつて、右の手足が動かなくなりました。言葉も話せなくなりました。脳こうそくという病気でした。それからリハビリをして、少しずつしゃべれるようになったり、動きだしたりしたけど、右手はうまく動きませんでした。だから、ピアノがひけませんでした。

けれど、そんな時に息子のヤンネさんから、左手だけの楽ふをもらいました。ひいてみたら、夢中になりました。泉さんは、左

手だけの音楽のすばらしさを見つけたのです。

それから、左手だけでピアノを演奏するようになりました。泉さんは、実は八十才をこえています。そんな年なのに、あきらめない気持ちを持っているのが心に残りました。すごいと思いました。

ぼくは今、テニスをしています。中学生クラスで、ぼくより上手な人と練習しています。ぼくは、いつも思うことがあります。それは、自分が下手ということです。この間、ぼくと組んで練習をする人から、

「えー、やだ。おれ、したくねえ。」

と、言われました。それで、ちよつと悲しくなりました。

練習から帰る時に、そのことを言ったら、お母さんが、

「そんなの気にせんでいいけん、がんばりよ。」

と、はげましてくれました。少し前までは、小学生の、ぼくと仲のいい友だちがいました。でも、その友だちはテニスをやめてしまいました。今のクラスはほとんど中学生なので、友だちがいません。テニスは好きだけど、友だちがいないので、練習に行きたくないです。お母さんに友だちがいらないことを言ったら、

「テニスの練習やけん、いらんやろ。」

と、言われました。そう言われても友だちがほしいです。練習にがんばろうと思いついたけど、一緒に練習をする人がいなくて、困って泣いてしまったこともありました。このことを家族は分かってくれないと思って、悲しい気持ちになりました。

でも、この本を読んで、失敗したり、負けたり、泣いたりしても、次にはがんばらばいいということが分かりました。舘野泉さんは、最初はピアノをひくことをあきらめて絶望していたけど、左手だけの音楽のすばらしさを見つけました。そして、努力をして、左手だけで、聴いている人の心を豊かにする演奏をしています。

ぼくも、泉さんのように、あきらめないで、テニスのみりよくや、今まで知らなかった楽しさを、もつと見つけていこうと思いました。そして、まわりのいろんな人と分かり合えるようになりたいです。そうしたら、またテニスの友だちもできて、いやだったテニスの練習も楽しくなると思います。

佳作

ありがとう

白杵南小学校 五年 高瀬 恋太朗

書名 おばあさんのしんぶん
著者 松本 春野

男の子が幸せそうに本を読んでいるな…。

表紙を見た時、この男の子、てつおの表情にひかれ、この本を読んでみることにした。

働き者のてつおが新聞を配りたいと言い出した。そんなてつおに、三原のおじいさん、おばあさんが、夕方、新聞を読ませてく

れることになる。てつおは、毎日それを楽しみにしていた。

てつおは、働き者で、一度すると決めたら真剣に取り組むことができる。そんなてつおをすごいと思う。ぼくは、五人兄弟の一番上だ。だから、てつおと同じように一番お手伝いをしている。妹や弟の面どうを見たり、ご飯を食べた後お茶わんをさげたりしている。でも、毎日できているかというところでもない日もある。てつおは、ぼくとちがつて家族思いだ。だから毎日欠かさず仕事ができるのだと思う。ぼくは、正直自分思いだ。だから、てつおとは少しちがつて自分のすきなことをゆう先してしまう。

月日は流れ、冬になり、おじいさんは亡くなってしまった。おじいさんが亡くなってしまったという悲しみとおじいさんが読み終わった新聞を読ませてもらう毎日が終わってしまうというざんねんな気持ちがあったのだと思う。でも、おばあさんは、てつおのために新聞を取り続けてくれた。

ぼくは、三原のおばあさんがてつおのことを家族のように愛してくれていたから、おじいさんが亡くなっても新聞を取り続けてくれたのだと思う。ぼくには、三原のおばあさんのように家族でもないのに優しくしてくれる人と出会ったことはない。でも、おばあさんのように自分を大切に思ってくれる家族がいる。転校したばかりで学校生活になれず、学校に行くのを不安に思っていたぼくに、

「大じょうぶ。すぐなかよくなれる。」

とはげましてくれた。だから今は楽しく学校に通うことができる。

家族は、ぼくにとってかけがえのない存在で、てつおにとっておばあさんは、同じように、大切な存在だと思う。

「おばあさん、そうだったの……だから、新聞はきれいだったの。」

ぼくは、この言葉で心がゆれた。大好きなおばあさんまで、亡くなってしまう、そう式で実はおばあさんは字が読めず、てつおのためだけに新聞を取ってくれていたという事を知ったのだ。おばあさんにとつて、てつおは家族の一員で、てつおが来るのがすごく楽しみだったから新聞を取り続けていたのだと思った。てつおもそんなおばあさんが亡くなり、さびしく、かなしくてどうしようもない気持ちでいっぱいになったと思う。

てつおは、これからも新聞を見るたびにおばあさんを思い出すと思う。そして、心の中でありがとうと思いつけると思う。ぼくも、これからは感しやの気持ちをわすれず、てつおのように一生けんめい歩んでいきたい。

佳作

奮闘するたすく

福良ヶ丘小学校 六年 遠 藤 香南海

書名 奮闘するたすく

著者 まはら 三桃

介護する人はどんな気持ちでしているのだろう。また、介護される人の気持ちはどんなだろう。それぞれにいろんな思いがあることを教えてもらった。

この物語は、佑と一平が早田先生からデイサービスの様子を詳しくレポートしてほしいとお願いされることから始まる。文章の苦手は佑は驚いて反対したが、先生の目から出るビームには逆らえなかった。結局、佑と一平はデイサービス「こもれば」に行くことになった。

二人のすごいなと思ったことは、あんなに反対していたのに、たくさんの手伝いをしていたことだ。しかも相手のお年寄りの気持ちを考えながら一人ひとりに優しく接していた。お年寄りからわがままを言われたりいやなことを言われたりして、大変な思いをすることがあったと思う。それなのにどうして佑と一平は介護をくじけずに続けることができたのだろう。それは、わがままやいやなことを言ってくるお年寄りにも積極的に接し続けたからだと思う。ずっと一緒にいて相手のことを見ていると、自然と相手の思いがわかるようになってくる。お年寄りの中には、「なぜ『こ

もれば』に行かないといけないのだろうか」「どうして自分の思うようにしてくれないのだろう」とはがゆい思いをする人もいただろうと思う。佑と一平はそんなお年寄りののがゆい気持ちを理解し、優しく寄りそうことができた。それでお年寄りの立場に立つた介護をすることができたのだと考えた。

私も小さい妹のお世話をしていたときに、わがままばかり言ってこられていやな気持ちになったときがあった。でも長く一緒にいたことで、だんだんと妹の気持ちも理解できるようになった。佑と一平の気持ちがよくわかった。

でも、いつもうまくいくとはかぎらない。優しく接していても、なかなか気持ちを通じ合わず、「せっかくしてあげているのに」と思うこともあっただろうと思う。私だったら、すぐに投げ出しているかもしれない。自分の思うようにいかないとき、すぐに相手に言い返したり関係のない人にも冷たい態度で接してしまったりして、相手のことをきずつけてしまう弱さが私にはあるからだ。だからこそ、投げ出さなかった二人がすごいと思う。

この本の佑と一平から、どんなにいやな思いをしてもかかわりをもち続けようとする心の強さと、相手の立場や思いを想像してその思いに寄りそいながら優しく接する大切さを学んだ。私も二人のように、相手の思いを想像して、相手の気持ちを大切にできる人になりたい。そして、積極的にいろいろな人に接していきたいと思う。

佳作

がんばりを支えてくれる力

川登小学校 六年 江藤 美来

書名 ぼくとベルさん

著者 フィリップ・ロイ

私の目の前に五メートルの線がある。その線をめがけてペダルをふみこむ。でもなかなか前に進めず一輪車は倒れてしまう。もう何回練習してきただろう。

私は今年、転校して新しい学校に来ました。この学校では、全校で一輪車の技に取り組んでいます。周りの友達はスイスイ乗れるのに、私は全然乗れません。何だか一人取り残されたみたいで、不安な気持ちでいっぱいになりました。

『ぼくとベルさん』の本を読んで私は苦勞をしている一輪車の事を思い出しました。

この本の主人公のエディは字を書く事も読む事も苦手です。得意な数学は他のだれよりも理解しているのに。字が書けない事で、エディは、周りの人たちからばかにされるようになります。でも、エディは、ベルさんへの手紙を七回も書き直して、長い時間かかって完成させました。読めないのに、お父さんから借りた辞書をひきながら、最後まであきらめないで、手紙を完成させたのです。エディのがんばりは、すごいことだと思いました。

また、「エディには無理だよ。」と言われるような本を読む事も、

すぐがんばりました。そのおかげで得た知識で、エディは、お父さんの命を救う事ができたのです。私は、エディは、どうしてもこんなにがんばれたんだろうと思いました。

大発明家のベルさんがエディの事を分かってくれて、はげましてくれした事が大きいと気づきました。ベルさんは、字を書けなくてあきらめそうになったエディにこう声をかけました。

「できた事を喜ぶんだ、いいね。」

ベルさんは、エディのかしこさを認めて、ほめたり、はげましたりしてくれました。そんなベルさんがいて、エディは、あきらめずにすごいことができていったんだと思います。

この本を読み始めたころ。私の一輪車は、一メートルも進まず、全く乗れませんでした。もしかしたら、このまま乗れないのではないかと、あきらめる気持ちもわいていました。でも、友達が「ここはこうやるんだよ。」とか一輪車の乗り方や目線や色々なコツを教えてくださいました。

そして、あんなに乗れなくて、もうだめだと思っていた一輪車がついに五メートル、十メートルと乗れたのです。私をはげましてくれた友達のおかげです。今、私は、友達から「成長したね、すごいね。」とほめられます。新しく目標をクリアしたりすると、友達も「オー。」と笑顔になってくれるのでとてもうれしいです。元気になるし、もつともつとがんばろうと思えます。

エディがベルさんに支えてもらっているように、私にも支えてくれる友達がいます。私はその友達のおかげで、あんなに困難だつ

た一輪車がうまくなってきました。私はその友達に感謝しながら、次は私が支えになれるといいなあと思っています。

佳作

「ゴミ」となる命

西中学校 一年 木村 菜々美

書名 いのちの花く捨てられた犬と猫の

魂を花に変えた私たちの物語

著者 向井 愛実

私はこの本を読んで初めて知る悲しい現実や衝撃がありました。この本は動物の殺処分についての本なのですが、殺処分について意味は分っていても知らなかったことの方が多く、殺処分への認識や考え方への甘さを感じました。

私が一番この本を読み衝撃的だったのは、処分された犬や猫の骨は、事業系廃棄物として「ゴミ」という形で捨てられることです。人間が「ペットが高齢になった」「子猫がたくさん産まれた」などの理由で動物愛護センターに連れていかれ一定の時間が過ぎると殺され、人間のように丁寧に墓にうめられたりせず、「ゴミ」として捨てられていくのです。こんな現実、知っていましたか？知らないふりできますか？

著者の向井愛実さんはこの現実にはショックを受け「いのちの花

プロジェクト」という活動を始めました。内容は、猫や犬の骨を肥料として使い、花を育てるのです。そうして殺処分された命を花としてもう一度生きさせてあげる事ができるのです。自分のみた現実にはショックを受け、行動するのは凄いなと思います。骨を肥料にするには、細く骨を砕く必要があります。骨を砕いていると「呪われる。夢に出るからやめろ。」など言う先生もいたそうです。人間を最後まで好きでいてくれた犬や猫にそんな事を言うなんて本を通じてでも悲しかったですが、直接言われた本人たちは酷く傷ついたのだと思います。

そんなつらい経験を乗り越え、農業高校生の甲子園といわれる場で最優秀賞と文部科学大臣賞と結果を残し、注目されるようになりました。

二〇一二年度に全国で愛護センターに収容された犬・猫は、約二十一万匹。センターやボランティアの努力で犬の五割弱、猫の約一割が返還されたり、譲渡されたりしていますが、それでも十六万頭殺処分されています。つまり、十六万頭の命が「ゴミ」として扱われてしまっているのです。人間も動物も同じ命なのに、人間は死んでもお墓に入れ供養されます。また、最後まで人間に育ててもらえれば同様です。つまり動物が最後までいい形で終えるか、まだ生きられる形を殺しゴミにするかは人間次第なのです。もし、犬や猫と人間の立場が逆だったら……と考えてみて下さい。自分自身は何も悪いことをしていない。ところが、勝手に施設につれていかれ、しまいは毒ガスで苦しまされ死んだら他の骨と

まじってゴミになる。とてもおそろしくないですか。「命は大切に」とよく聞きます。人間の命はほとんど守られているかもしれない。しかし、この現状で動物の命は大切にされていると言えるのでしょうか。これは、私は命の差別だと思っています。人間どうしならこんなことする人はいません。でも他の生きものなら、人間は十六万頭も殺すのです。そして、殺されてしまった後も、「呪われる」「夢に出るからやめろ…」おかしくないですか。私はそう思います。だから、向井愛実さんのようなことはできませんが、こんな風に知って伝えたいことを作文にまとめて読んで知ってもらったり、殺処分についての本を友達にすすめてみたりして、こんな現状があるんだ。ということを知ってもらって、ちよつとでも命について考えてもらえると嬉しいのです。

でもこれは殺処分について本を読んだり、調べたりしないと共有することは難しいです。だからまずは、身の周りの家族や友達への接し方から考え直し、もちろん「いじめ」「差別」は絶対にダメです。そんなところから何か変えていくと、命や友達・家族の大切さについて改めて何か感じられるものがあるのではないかと私は考えます。犬も猫も動物も人間も周りのいろいろな人から愛され育っている世の中になればいいなと心から願います。

そして私は思います。この「いのちの花プロジェクト」が良い形で終わってくればいいなと。良い形というのは、殺処分などで殺されて出る骨がなくなり、肥料にする骨がなくなつて終わるという事です。つまり、これが起こった時には殺処分が全国でな

くなっているということです。向井愛実さんも少しでも殺処分の現状を知ってもらい、将来的には殺処分「ゼロ」の世の中を願っていると思います。私も誰一人、人間も動物も悲しまない世の中がくることを願っています。

佳作

笑顔で生きよう

東中学校 二年 児玉 ひより

書名 がばいばあちゃんの笑顔で生きんしゃい
著者 島田 洋七

「アホ」「バカ」「さわつたらうつるぞ」。この言葉は、私の心に突きささった。これは知的障がいがある女の子アラタちゃんに向かつて発せられた言葉だ。

私もそんなふうに言われたことがある。小学校で転校した頃だ。トイレに呼び出され、

「あなたのことが嫌いです。」

と言われたこともあった。だから、アラタちゃんの気持ちがよくわかる。常に見られているような気がして、何をするのも怖かった。いつも人の目におびえていた。

しかし、アラタちゃんは違った。知的障がいを持っていても言われて嫌なことはわかる。だから、きつと自分に対してつらくあ

たる人のことは、わかっていたと思う。それでも、いつも笑顔でニコニコしていた。アラタちゃんは、とてもいい人なんだとはじめは思っていたが、よく考えていくと、それはアラタちゃんの生きていく方法だったのではないかと思うようになった。

私は、いじめを受けていた時、いつも暗い表情をしていたのではないかと思う。だから仲の良かった人にも心配をかけ、距離をおくようになった友達もいた。そんな時に、この本に出会った。だから、アラタちゃんの笑顔は強烈に私の心に響いたのだと思う。

「俺が守らなきゃダメなんだ。」

という僕の言葉も忘れられない。いじめられる人に対して、守ってあげたいという気持ちと、それを実行しようとする僕の強い意志が見えたからだ。私にも、守ってくれた人がいた。陰から支え、友達でいてくれた人がいた。それがどんなに勇気のいることか、今の私にはわかる。次のいじめのターゲットになるかもしれないというリスクがあるからだ。私自身、「守ってあげたい。」と思っ
ていても、それを実行に移せないかもしれない。この僕の勇気を
ひき出したのも、アラタちゃんの笑顔なのだろう。笑顔は、周り
の人達も変えていくことを実感した。

「人に気づかれないのが本当の優しさ、本当の親切。」

この言葉も、私の胸に深く刻まれた。この言葉を目にした時、私は思わずうなずいて、ニコリしてしまった。私の友達のことを思い出したからだ。その友達はとても親切で、自分の気づいたことは、すぐにやってくれる。ある時、他の人の散らかっている

机を、気づかないうちに片づけていた。片づけてもらった人は笑顔で、「ありがとう」と言っていた。その時、私は自分が言われたわけでもないのに、心がポカポカ温くなった。自分でもわからないくらい、うれしくなった。私の周りには、さりげなくこんな優しさを分けてくれる人がいると思うと、とてもうれしくなった。私も人に気づかれないうちに、親切なことをしようと心から思った。

「笑っておけば、周りも楽しそうになる」

苦しくつらい時、私はがばいばあちゃんのこの言葉を実践しよう
と心がけた。つらくてもいつも笑顔でしようと心に決めた。学
校でも家でも笑顔でいると、

「どうしたの。うれしそうだね。」

と声をかけられるようになった。そこから話ができるようになり、
本当の私を知ってもらえるようになったと感じている。大げさな
言い方かもしれないが、私が笑顔でいると、周りの人も笑顔にな
る。この本を読むまで、誰かに声をかけることすらできなくなっ
ていた私にとって、これは、大きな変化だった。笑顔でないと、
「大丈夫？ 元気がないの？」

と声をかけてくれる人も、いるようになった。私は「笑顔ってま
るで魔法のようだ。」と感じた。知らず知らずのうちに、私もク
ラスの輪の中に入れるようになった。私に話かけてくれる友達が
いる。そう思うとうれしかった。いろんな葛藤があつたけれど、
本当に笑顔でいようと決心してよかったと思っっている。

がばいばあちゃんは、強くたくましく優しいおばあちゃん。その教えは、私のこれからの生き方を大きく変えてくれた。

今、私はクラスの仲間と自然に笑い合えるようになった。自分が正しいと思うことを、実行できるようにも、発言できるようにもなりつつあると思う。学校でのベスト挨拶をめざそうと、笑顔で大きな声で挨拶するようにもしている。つらくても苦しくても「笑顔」で人に接することの大切さを、私は学んだ。

これから私は、がばいばあちゃんの教えを胸に、精一杯自分らしく生きていきたいと思う。

佳作

絆が人を変える

南中学校 二年 渡 辺 椿 華

書名 かがみの孤城

著者 辻村 深月

「うじうじしていないで、学校に行ったらいいのに。」私の声かけに、こころは弱々しくこう答える。「だって、あんなに怖い思い、もうしたくない。」

いじめを理由に、学校に行けなくなった中学一年生のこころは、家に閉じこもるようになる。何も悪いことをしていないのに引きこもるこころを私は理解できなかった。

そんなところに、大きな転機が訪れた。五月のある日、部屋の鏡が突然光を放ち始めたのだ。それを潜り抜けると、城のような建物に行き着く。そこには、「オオカミさま」と呼ばれる少女と、アキ、フウカ、リオン、マサムネ、ウレシノ、スバルの、六人の中学生が待っていた。オオカミさまは、こころを含めた七人にミッションを与える。城の中に隠されている「願いの鍵」を探し出し、「願いの部屋」の扉を開けること。そうすれば、願いをかなえることができるという。期限は来年の三月三十日まで。それを過ぎれば、城に入ることができなくなるし、それ以前に、誰かが願いを叶えてしまえば、その時点でゲームは終わり、みんなの記憶も消されてしまう。

私はわくわくした。もし自分だったら、「お金持ちになって、家族や友達と一緒にたくさん旅行に行きたい」と願うだろう。考えるだけで楽しくなった。

それなのに、こころの願ひ事は、「真田美織が、この世から消えますように」だった。真田美織は、こころをいじめていたメンバーの中心人物だ。自分の彼氏が、小学校時代にこころのことを好きだったという理由で、こころに嫌がらせをしていた。「たしかに、真田さんはひどいことをしたと思うけど、彼女を消すのが願ひごとって、寂しくない？」私はまた、問いかける。「あなたに私の気持ちなんて分らないよ。」そう答えるこころに、むつとする。「たしかに、私はあなたの気持ちを分かってくれられないかもしれない。けど、いつまでも人を恨んでいたって悲しいだ

けでしょ？お父さんもお母さんも心配しているし。せめて、『心の学校』には行ってみたら？お腹が痛いんだったら、病院に行ったら？このままでいても、前には進まないよ。」少しお説教のようになつてしまった私の声かけに、こころは何も返してくれない。

心配する私をよそ目に、こころは城に集まる仲間との交流を深めていく。ある日、フウカの誕生日であることを知ったこころは、プレゼントを買いに、ショッピングセンターに出かけようとする。しかし、途中で自分の通う中学校の生徒を見かけ、気持ちが悪くなる。どうしても前に進むことができず、途中で寄ったコンビニで、何とかチョコレートを買って帰った。

私はその時、こころの心の傷を始めて理解できたような気がした。仲間のために勇気を出して外に出たのに、買い物すら思うようにできなかったことは、どれだけつらかっただろう。「よく頑張ったね。」「うん。」「大丈夫、フウカも喜んでたじゃない。」「落ち込むところをなぐさめる言葉が、思うように見つからなかった。このことをきっかけに、それまでこころにいら立っていた私は、こころを応援するようになった。

十月の終わり、アキが制服で城を訪れたことから、全員が雪科第五中学校の生徒であることが分かった。するとマサムネが「一回でいいから、学校に来てほしい」と願い出る。みんなが登校してくれば、自分も行けそうだと言うのだ。それは、不登校のメンバーにとって難しい課題だった。しかし、全員がマサムネの願いを受け入れた。私はその時、数か月の間に育んできた、七人の

絆を見たような気がした。私は、心配になつてこころに尋ねる。「本当に行けるの？」「うん。怖いけど、みんながいるから。」「こころは、少しずつたくましく成長していたのだ。

しかし、実際に登校してみると、誰もいなかった。私は、他のメンバーが裏切ったのではないかと思つた。「みんな、裏切ったのかな？」「そんなことがあるわけない。私は、みんなを信じてる。」「こころは仲間を少しも疑つてはいなかった。それまで、家族にすら悩みを打ち明けられなかったところが、誰かを大切に思えるようになったのだ。さらに、三月三十日、願いの鍵を見つけた時、こころは自分本位なかつての願いを忘れ、ためらいもせず、仲間を救うための願い事をした。その姿は、頼もしくかつこよかった。願いがかなえられたということは、記憶を失うということだ。しかし、何か温かい物が心の奥底に残つたに違いない。」「もう、大丈夫だね。」「うん、最後までみんなを信じてよかった。」「きつとこころはこの先たくさんの友達を作れるだろう。私もこころがそうであつたように、優しさと勇気を誰かのために使える人でありたい。こころに負けないように、これからを過ごしていくつもりだ。

審査評〈感想文部門〉

【総 評】

二学期の活動の成果による入賞作品です。今年の取り組み総数は、一九一六名。各学校の校内審査の後、一八二名の感想文を審査員五人で審査しました。

審査に当たっては、

- ①年齢・学年にふさわしいものであるか
 - ②原文をよく読みこなしているか
 - ③要旨・主題を正しく豊かにとらえているか
 - ④ものの見方・考え方が自分なりに価値付けられているか
 - ⑤美しく正しい文章になっているか
 - ⑥感銘深い作品になっているか
 - ⑦プライバシーの点で、問題にならないか
- の項目を配慮しました。原稿用紙の枚数（字数）も審査条件になりました。

どの作品も、一冊の本に立ち止まり、知識や人との出会いを通して、驚き、共感し、新しい世界が広がっていくことの喜びが書かれていました。疑問や悩みに対して、解決のきっかけが見つかり、これからの生活の考え方、生き方を自分自身に言い聞かせるような姿もありました。

小学校高学年、中学生、高校生と成長するにつれ、読み取っ

たことから、自分の内面を見つめ、自分を変えていこうとする自己内対話の部分が多くなり、日々の学習の成果が十分に感じられました。

今後、注意することとして

- ・誤字や脱字、ひらがなが多い。
 - ・今年は特に、文が長すぎて、言葉の重複や主語、述語のねじれがあった。
 - ・「心に残ったことが三つありました。一つめは…、二つめは…、三つめは…」と、その場面や文をぬき出すだけでなく、どのように受け止めたのか書くように。
 - ・文字が小さすぎる、薄すぎる。
- などが挙げられます。提出前に音読する習慣をつけると推敲ができます。

感想文を審査し、「読書のまちづくり」は確実に浸透していると感じさせていただきました。

このコンクールに関わられた全ての皆様に心から感謝申し上げます。

エッセイ部門

臼杵市長賞

臼杵つ子

臼杵市 新上ゆみ

わが家が臼杵に移住してきたのは四年前。主人の実家である築百五十年の武家屋敷をリフォームして、新生活をスタートさせた。

当時息子は小学校二年生。初めての転校をどんな風に感じていたのだろう。一学年六クラスあったマンモス校から一クラスの小規模校へ。片道五分だった通学路は約三十分になった。そこには城下町ならではの白壁や樹木の緑、声をかけてくれる近所のおじちゃん、おばちゃんたちの姿があった。私はこの町が息子や私たち家族を、温かく見守ってくれる土地であると、日を増すごとに確信していった。

そんなある日、事件は起きた。

「はやとくんのお父さんとお母さんへ」

と書かれた手紙を、息子のクラスメイトから受け取ったのだ。そこには、

「はやとくんを野球部に入れて下さい。練習を見に来て下さい。」

お願いします。待っています。」

と、熱い想いが綴られていた。

野球部!? ウチノムスコが!?

最初の感想は正にそれ。確かに体を動かすことは好きで、足も遅くはなさそうだ。でも野球部!?

というのは、野球部は練習も大変で、試合の時の送迎やお茶当番など、何かと親の出番が多いと聞いていたから。二の足を踏みながら、しかし一度は見学へと、ホームグラウンドの臼杵公園（通称公園地）に上がった。

二月の澄んだ空気の中、弾む白い息、熱い坂道ダッシュ。息子は皆に混じって走った。全身から「楽しい!!」が溢れていた。

帰り道、

「ユニホーム買って!!」

息子の決意は固かった。彼の決断を応援しない訳にはいかない。親も覚悟を決め、その足でスポーツ用品店へ向かった。

入部から三年。息子は文句一つ言わず、意気揚々と日々の練習に出かけて行く。

もし臼杵に移住していなかったら、と時々思う。百五十年の家は朽ち、息子に野球や今の友だちはなかっただろう。

「はやとくんを野球部に入れて下さい」

そう誘ってくれる子どもを育ててくれたわが町臼杵。通学路にはいつも知った顔があつて、挨拶を繋いでくれる。地域と学校が丸となって子どもたちを見守ってくれている。

息子は野球を通して、友だち付き合いや大人との関わり合い、また白杵の四季折々の自然や街並みを肌で感じていることと思う。伸び伸びと、豊かな毎日をこの土地で過ごせることが何より幸せだと、いつか気付ける人間になってほしい。そしてその土台を培ってくれた白杵を、また次の世代に誇りを持って伝えられる人になってほしいと願っている。

白杵っ子、大好き!!

審査評

四年前に白杵に移住してきた一家。その中で出会ったクラスメイト、野球部の仲間、地域の人に支えられて伸び伸びと育つ息子さん。スポーツを楽しむ我が子を見て、応援しようという気持ちになっていく新上さん自身の心の変化が良く書かれています。体言止め、会話を入れた簡潔な表現で、テンポの良い文章になっています。この作品を読んで「白杵は子育てしやすい町。白杵大好き!」と、とてもうれしく思います。

白杵市議会議長賞

拝啓 首藤定様

白杵市 吉田 道代

拝啓 深田の石仏前の稲穂と彼岸花が色鮮やかに秋風に揺れています。今年もあなたが所有されていた福田平八郎の「花菖蒲」が、大分県立美術館に展示されます。あの水辺に咲く花菖蒲の青の濃淡、すつと伸びた花や葉が風に揺れているかのようにつむ姿にあなたも魅せられたのでしょうか。

数多くの美術品を収集されていたあなたですから、私は大変裕福な家に生まれ育ったのではないかと思っていました。しかし、あなたは白杵市の農家に生まれたそうですね。ご家族のご病気やお母様のご不幸で、望んでいた上級学校への進学も叶わず家族を支える立場だったと聞きました。中国に渡られてからも働きながら中国語、簿記、漢文など学ばれたそうですね。私達の時代は誰もが学校へ通えるようになりました。学ぶことに対する感謝や意欲が薄れてきています。あなたの当時の気持ちや懸命に努力することが、あなたの資産家としての成功へと導いたことなど、今の子ども達に話してほしかったです。

中国や日本の美術のすばらしさを大連の人々に伝えるため、美術品の収集を始めたそうですね。その美術品の公開する私立の美術館を建てたいという夢を持っておられたと聞きました。そ

のような思いで収集された五百六十一点もの美術品を、戦後大連に住む日本人の救済のために、食糧と引き換えに旧ソ連政府に譲渡されました。あなたは夢を諦め、築き上げたものを手離すことに執着や未練はなかったのですか。食べる食糧もなく苦しむ日本人を見捨てることは、あなたにはできなかったのでしょうか。苦しんでいる人々を救えるのならと決断されたのですね。多くの尊い命があなたによって救われたのです。あなたは白杵に住む私達の誇りです。あなたの愛情は人類愛とも言うべき深いものであったと思います。人は、自分や家族は大切にしても他人はどうなってもいい、というような考えに落ち入りやすいものです。私もあなたのようにあらゆる人に思いやりを持ち、接していきたいと思えます。

あなたが亡くなった後、あなたの集められた美術品の一部が旧ソ連政府から返還され、日本に帰って来ました。数年前にはあなたのロシア所蔵の美術品と共にこの大分の地でも展示されたこともありました。あなたが生前成し得なかったあなたの夢は受け継がれています。ロシア国立東洋美術館で大事に所蔵され、ロシアの人に東洋美術のすばらしさを伝えています。日本に住む私達にもあなたが収集された美術品にふれる機会が与えられています。本当にありがとうございます。あなたの集められた美術品たちが今も色鮮やかにあるように、あなたの思いはずっとそこにあるように感じます。どこかでまたあなたのコレクションに出会うことがあるでしょう。その時に又、お手紙の続きを書きたいと思いま

す。では、この辺で失礼いたします。感謝をこめて。

かしこ

首藤定様

審査評

首藤定さんに語りかける形で、彼の生い立ち、考え方、功績を紹介し、自分の思いを述べています。集めた大切な美術品を、戦後、食料と交換し、困窮している日本人の命を救った実業家が白杵にいたことを知り、誇りに思いました。手紙形式の優しい文体で、書き出し、結びも工夫され、素晴らしい構成力です。花の描写で視覚的にも色鮮やかな美しい文章になっています。原稿用紙の手書きの文字が美しかったです。

臼杵市教育長賞

臼杵や野津の偉人の功績と感謝の心

臼杵市 芋岡勝一

私達の生活は歴史の一齣であり偉人に有形無形の恩恵を受けていると思います。私は臼杵や野津の文化財である石造物やキリシタン遺跡、歴史的な建造物等を見て歩いています。その過程で身近に臼杵や野津の偉人の功績を知りました。今回は農業に関して今でも私達に貢献してくれている偉人とその功績について少し触れてみたいと思います。

日本人は米を主食として生活しています。江戸以前の税は年貢と言われ、米等の生産物が中心でした。米の生産量拡大が藩の財政を潤し、民の生活を豊かにしてきたのです。権力者に頼らず、自らの力で民の生活を豊かにする為に生産や運送等様々な面で私財を惜しまず投入し、努力した偉人達がいました。功績を称えた碑や足跡が沢山残っています。一部ですが紹介致します。

一、安政橋 所在地 野津町野口

人馬の交通と仮屋津留一帯の田畑に水を引く水路橋として安政五（一八五八）年川登村の大庄屋広田勘解由と南野津村の大庄屋赤嶺岩右衛門の二人の義民が着工し、息子の赤嶺岩三が完成させました。しかし、その後壊れて、大正六（一九一七）年に今の形になりました。川に美しい影を映す石橋です。

今でも人々は田植期に水路を清掃し、水を流し田畑を潤します。

義民の私財を投じた高い志の御蔭なのです。十号線より見えます。

二、岩崎井路 所在地 臼杵市家野

この井路は家野村の水不足を解決する為、岩崎陣房によって、文政二（一八一九）年に工事を始め、足掛け六年を経て文政七（一八二四）年に息子正房と名石工織平によつて完成しました。陣房は現在の南中学校付近の硬い岩盤等の難工事の過労がたり、志半ばで亡くなったのです。名石工織平による岩盤掘削の成功を病の床で聞いた陣房は涙を流し喜んだそうです。二万一千余の人々と陣房の全財産を投じた執念により工事は完成しました。

家野の今の肥沃な大地と豊かな生活は、岩崎親子と織平という義民の高い志の御蔭なのです。南中学校付近に石碑があります。

三、不欠塚 所在地 臼杵市望月

望月付近の田畑は大雨の度に堤が流され耕作出来ませんでした。江戸中期に疋田不欠が「水の流れに従つて水勢を和らげる」事に気づき洪水に耐えられる堤を作りました。

現在の肥沃な田畑は不欠の御蔭なのです。天保九（一八三八）年に村人は不欠塚を建てて功績を称えました。不欠塚は望月台地の入り口にあり、五〇二号線より見えます。

農業に関する七人の偉人とその功績について触れましたが、他にも臼杵には多くの偉人がいました。私の住んでいる海浜には山本達雄、浜町の野上弥生子、図書館を寄贈した荘田平五郎等々です。私達は偉人の功績の恩恵を受けて生活している事を忘れずに

感謝し、何時迄も大切にしたいものです。

審査評

郷土史に造詣が深く、先哲の残した史跡を訪ね、今回は農業のために貢献した偉人について書いています。わかりやすく簡潔にまとめられ、臼杵の文化財や史跡を身近に感じることができました。この文章を読んだ多くの人が現地を訪れ、大変な苦勞をして作った先人の思いに触れていただきたいと思います。

特別賞

臼杵の偉人ゝ祈りの里深田を偲ぶゝ

臼杵市野津町 村上 丈士

豊後水道臼杵藩の海の幸と岡藩の山の幸の出合いの場が、常に物々交換の市があつた野の（港）みなど、野津市であつた。

その野津から岳山谷を臼杵街道に入ると、稲田の中に半分土に埋もれた石の鳥居が在る。その川沿を奥に入ると深田の郷の神ほとけの神院が点在する。名もなき石工達が祈りの場として石佛を彫った。信仰に万を超す人々が手を合わせに来る様になりハスの花が咲き、この郷は神社佛閣が建ち並び、祈りの郷と成つたと思われる。

野津市村の寺小路にはマリア様を慕い、キリシタンが集い、川一つへだてた下藤村には、のがれキリシタンの集落が、ひそかに山中に居をかまえ、小屋小屋の中央で祈りをささげた遺跡が今も残っている。

のちにこの下藤村に居をかまえた名氏帯刀を許された広田吉衛門は、日々臼杵の城下町に商いに行き、多くの話題をふりまき、野津市と臼杵の絆を作ったことは史実に残っている。

常々市が開かれていた野津市村は、秋の取り入れが一段落すると十一月三日、四日を三日市として祝い、田野村・川登村・南野津村・戸上村の野津郷を巻込む盛大な祭りに発展して今日まで

綿々と続いている。

野津とは市のたつ野のみなととして成り立って来た時代の名残を残し、平成の合併で臼杵市となったのも、自然のなせるわざと思える。

臼杵の偉人野津市の偉人を思い起こせない私だが、臼杵と野津市村には時に応じた祈りの場があったことが偲ばれ、心ならず私です。

審査評

八十歳という年齢で、これまでも何度かエッセイコンクールに応募しています。自分の考えや思いを文章に書き、発表しようと挑戦する姿は、励みになり元気づけられます。知識も豊富で、故郷を大切にする、温かい思いを持ってもらえることが伝わってきました。手書きの文字にも何とも言えない味わいを感じました。

審査評〈エッセイ部門〉

【総評】

エッセイ部門は平成二十四年度に始まり、今年で七回目となりました。今年は六名の応募がありました。

①テーマの趣旨に沿っているか。②伝えたいことの要旨が明確になっているか。③美しく、正しい文章表現になっているか。④感銘深い作品になっているか。⑤誹謗中傷やプライバシーの点で、問題にならないか。

という審査基準を踏まえ、四人の審査員で審査をしました。昨年までの「私と臼杵」に加えて、今年は、図書館開館百周年を記念して「臼杵の偉人」もテーマに設定されたので、臼杵の偉人について書いている人が多かったです。皆さん、研究熱心で、歴史や文化について深い知識があり、ふるさと臼杵に対する愛着を持っておられます。

偉人については、功績やいわれだけでなく、自分とのかかわりや自分の思いについて書くと、深まりのある作品になると感じました。

文章表現は、原稿用紙三枚にうまくまとめ、伝えたいことの要旨が明確で、誤字、脱字も少なく、よく推敲されていました。

課題は、出品数が少ないことです。ぜひ、たくさんの人に、特に若い人たちに挑戦してほしいと思います。

読書感想画部門

臼杵市長賞

うみキリンとあそぶわたし

市浜保育園 長澤 昇子

書名 うみキリン

著者 あきやま ただし



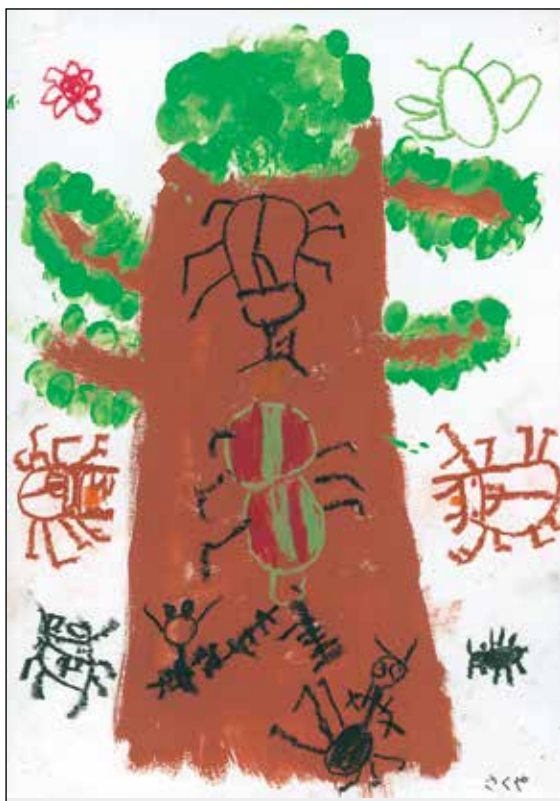
臼杵市議会議長賞

ぞうきばやし

野津北保育園 吉良 咲耶

書名 ぞうきばやしのすもうたいかい

著者 広野 多珂子



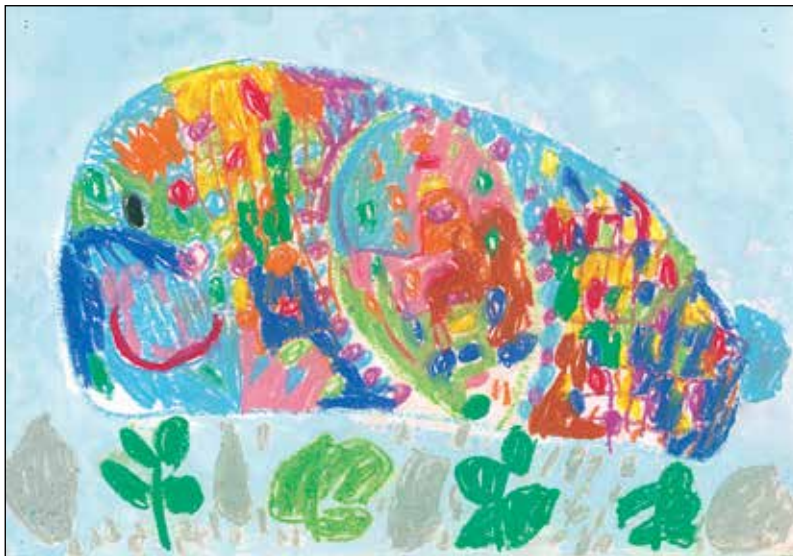
臼杵市教育長賞

ふありー

すみれ保育園 玉田 みちる

書名 にじいろのさかな

著者 マーカス・フイスター



百周年記念荘田平五郎賞

ともだちたくさんうれしいな

アソカ幼稚園 竹田 零弥

書名 やどかりのおひっこし

著者 エリック・カール



優秀賞

ピコリみすいろは「シャワー」くるまにつめたいみずがかります

野津幼稚園 白杵 萌南

書名 しんごうきピコリ

著者 ザ・キャビンカンパニー



優秀賞

はるひ弁当

すみれ保育園 釜崎 晴陽

書名 ベベベん

著者 さいとう しのだ



優秀賞

はりやまじごくへようこそ

中央保育所 亀井 琉莉

書名 じごくのそうべえ

著者 田島 征彦



優秀賞

水たまりににじがうつたよ

アソカ幼稚園 国崎 巧

書名 そらめくんのぼくのいちにち

著者 なかや みわ



優秀賞

たこやきマントマン参上!

野津南保育園 首藤 煌牙

書名 たこやきマントマン

著者 高田 ひろお



優秀賞

おばけのみえないせかい

カトリック白杵幼稚園 中村 杏里

書名 10ぴきのおばけのたんじょうび

著者 にしかわ おさむ



優秀賞

海藻をたべるうみキリン

市浜保育園 廣瀬 莉乃

書名 うみキリン

著者 あきやま ただし



優秀賞

ぴんくさんとかぼちゃ

白杵保育園 渡辺 愛梨

書名 ぴんくさんとかぼちゃ

著者 島津 和子



審査評〈感想画部門〉

【市長賞】

大好きななかよしキリンさんと気持ちよさそうにぷかぷか海遊び。キリンや子どもの表情がとても生き生きしています。「わぁーい。きゃっ、きゃ。」と、はしゃぐ声までも聞こえてくるようです。美しい海、空の力モメや大きな岩も自分の中の思い出の海と重なっているように思えます。

【議長賞】

「はっけよい、のこった、のこった!」と、ぞうき林で、にぎやかに虫たちのすもう大会がはじまりました。行司役の虫もいれば、今まさにじりじりと追い込んでいる虫、おっかなびっくりの虫、応援している虫もいます。迫力あるお話の世界がえがけています。

【教育長賞】

にじいろの魚が画面いっぱい大きくえがかれています。色とりどりの細やかな魚のようをていねいにかきこんでいます。みちるさんの思いがあふれるもようのにじいろの魚ができ上がりました。魚の表情がとてもかわらかで、あたたかさが伝わってきます。

【百周年記念荘田平五郎賞】

主役のヤドカリさんを大きくまん中にえがいていて、迫力があります。

長く伸びた手足に動きがあります。ヤドカリさんを囲むようにたくさん海の友だち、カニさん、タコさん、魚さんたちもえがかれ、にぎやかさが伝わる楽しい作品です。

【総評】

来年少学校一年生になる幼児を対象に感想画の募集を始めて、三回目となりました。年々応募者が増え、今年は九園から二一八名の応募がありました。取り組んでいただいた関係者の方々に感謝します。

小学校の図工と図書館教育担当の先生が二人で審査をしました。幼稚園、保育園と小学校が連携する取り組みの一つとして、楽しく審査することができました。

どの作品も、本の挿し絵ではなく、工夫して書きたいことが見る人に伝わる絵でした。好きな場面を楽しんで描いている様子が伝わってくる作品がたくさんあり、先生方が、子どもたちの思いを引き出す、ていねいな言葉かけをしている様子が見えます。思いを引き出すための言葉かけの様子を小学校低学年の先生方にも教えていただきたいと思いました。

賞に選ばれた作品は、画面いっぱい中心となるものを大きく描き、自分の思いが表現できていました。大きいだけではなく、細かいところもていねいにかき、色をぬっていました。登場する人物や生き物の表情、笑顔や動きが豊かに表現されていて、本を読んだ感動が画面に表れています。水彩を使ってぬり込んでいる作品は、中心になるものがより一層目立って効果的になっています。

これからも楽しい本をたくさん読んでください。本の中には知らない世界がいっぱいあります。また、生き生き、のびのびした絵も描いてください。「本を読んでこの本の絵をかいみたい」という気持ちも大切にしましょう。

小学生になるのを楽しみに待っています。

白杵図書館開館百周年記念 標語・川柳入賞作品

白杵市長賞

〈標語〉 心届ける読み聞かせ すくすく育てと願いつつ

白杵市野津町 原 陽子

百周年記念賞

〈標語〉 図書館は 我が人生の 道標

白杵市 折口 シゲ子

白杵市教育長賞

〈川柳〉 本を読み 気づけば空は あかねいろ

東中学校 三年 国 吉 琉 生

〈川柳〉 絵本にも 生き方学ぶ われは古希

白杵市 田 中 孝 代

〈川柳〉 幼な子の 笑顔の先に 絵本かな

白杵市野津町 柳 井 ひとみ

莊田平五郎賞

〈川柳〉 退職し 図書館デビュー 活き活きと

白杵市 北 山 為 友

〈川柳〉 本開き 新たな世界 旅をする

東中学校 三年 金 崎 わかな

〈標語〉 本を読み 心の財産 増やそうよ

佐志生小学校 六年 吉 賀 渉乃花

〈標語〉 楽しいな 何度も読むよ 同じ本

白杵小学校 四年 児 玉 要